



## 一粒の希望 — 土地は誰のもの?!

2015年9月3日(木)～12月15日(火)  
アジアギャラリー

豊穡なるアジアの大地は、古来よりそこで暮らす人々の生活や伝統文化を育んできました。しかし16世紀にはじまる西洋列強による植民地化や近年の大規模な土地開発は、昔なじみの土地を多くの人々から奪ってきたのも事実です。コレクション展「一粒の希望—土地は誰のもの?!」では、社会的メッセージ性の強い作品を3つのコーナーに分けて展示し、グローバル化に曝された民衆と土地をめぐる問題について考えます。



(左から) ①アグス・スワゲ「サイチョウと宣教師」1988年 ②タリン・パディ「泉を守れ」2009年 ③作家不詳「広い天地で革命の決意を鍛え、農村に住みつく気持ちは変わらない」1970年 ④ジャン・ダーリー「破壊（世界金融センター）」1998年

### 1 インドネシアに押しよせるグローバリズムの波

インドネシアでは、17世紀に設立されたオランダの東インド会社がジャワ島をはじめとする島々を次第に植民地化していきます。オランダによるこの支配は以後300年以上続きますが、皮肉にもそのことが多種多様な民族と文化を有するこの島々をひとつにまとめ、インドネシアという国家の独立を導いたのでした。

アグス・スワゲの《サイチョウと宣教師》は、そうした西洋人による植民地化の様子を描いています。前面に大きく描かれているのがカリマンタン島の守り神で、その背後では天使の姿をした宣教師が、島民にむかって何やら語りかけています。キリスト教という信仰や医学のような近代的知識によって、目に見える土地だけでなく、人々の精神世界も大きく塗り替えられたことが示唆されています。

一方の《インコとコーヒーの木》は、まさにバリ島らしい風情をたたえています。しかし、コーヒーの木はインドネシアの原産ではありません。アフリカに自

生していた木をオランダ東インド会社が持ち込んで、輸出用の大規模農園で栽培したのがはじまりです。今では世界のコーヒー豆の6%程度がインドネシアで生産されていますが、コーヒーの歴史にも植民地時代や土地をめぐる争いの影を見つけることができます。

とはいえ、濃密な緑や空気感、祝祭に彩られた神秘的な島バリは、私たちの旅心を強く引きつけます。バリの画家ワヤン・ベンディが描いた《バリの祭式》のように、世界各地からの観光客でバリ島はいつもあふれかえています。海岸部には外国人観光客用のレストランや娯楽施設がひしめき、空港へ直結する高速道路が海上を走っています。その一方で、こうした土地開発に危機感をもつアーティストたちも大勢います。イクトゥット・ブディアナはそのひとりで、バリの伝統的な世界観を描きだす優れた画家です。《母なる大地の力》では、土地の守り神である魔神ラクササが怒り狂った姿で迫ってきます。

## 2 タリン・パディー 土地は誰のもの？！

「民衆文化連盟タリン・パディ」はインドネシアで結成されたアーティスト集団です。スハルト政権崩壊まもない1998年12月にジョグジャカルタで結成され、2004年まで旧美術学校の校舎を占拠し活動していました。その後メンバーは大きく入れ替わりましたが、創立メンバーのモハマド・ユスフを中心に、現在もグループとして存続しています。

このグループの特徴は、社会的メッセージの強い作品を制作し、人々に直接働きかけようとする点です。「アート、アクティビズム、ロックンロール」をモットーに、各地の政治問題を扱うバナーやポスターなどの絵画・版画、かかしなどを制作し、街頭デモや集会で労働者、農民、漁民の生存権のための闘争を支援してきました。

ここでは、タリン・パディのメンバーたちが制作した、素朴ながらも強烈なエネルギーを発散している木

版画をまとめて紹介しています。特に、署名もなく印刷数の限定もない《採掘は生活をおびやかす》は、作家性や作品のオリジナリティーを神聖視する「美術」としてではなく、社会的抑圧に苦しむ名もなき人々の声を代弁しようとする彼らの制作態度に、より合致しているのではないのでしょうか。

タリン・パディはインドネシア語で「稲の芒（のぎ）」を意味しています。米はインドネシア人にとっての主食であり、生きていくには必要不可欠な大切な食物です。しかし、その芒に一体どのような意味が込められているのでしょうか。彼らの言葉によれば、「芒のささくれに触るとひっかき傷ができたり、痒くなったりする」ように、「タリン・パディの作品やメッセージは心地いいものではないし、ときには苦痛だったり、我慢できないことだってある。でもこの国の癒えない傷に何度でも触るのがタリン・パディ」なのです。

## 3 国家の理想と現実

つぎに目をむけるのは、私たちに身近な東アジアの国々です。中国では1949年に中華人民共和国が成立し、社会主義国家としての理想にあふれたイメージやスローガンがポスターとして大量に印刷されました。こうした政治宣伝用のポスターは、中国の伝統的な年画（新年になると家の内外に貼られる吉祥画）のスタイルを踏襲しているため「新年画」と呼ばれています。

その中のひとつ《広い天地で革命の決意を鍛え、農村に住みつくと気持ちは変わらない》は、都会の青年たちを農村での肉体労働に従事させた「上山下郷運動」を称揚したポスターです。多くの新年画のように白い歯をみせて笑う人々が描かれていますが、農民・労働者の連帯や農村支援といった美名のもとで、この政策が都市労働者の放逐と彼らの思想教育を目指したものだとの批判もあります。

一方《破壊（世界金融センター）》では、中国都市部ですすむ再開の光と影が同時に写し取られています。作者のジャン・ダーリーは、取り壊される家屋にスプレーで横顔を描き、壁ごとくりぬくという作品を

1995年頃から展開させてきました。その背景には、拡大する富の不均衡や人権問題、汚職、公害など、社会主義の理想から資本主義へと大きく舵を切った中国の悩ましい現実があります。

また韓国では、イ・ユニユプが民衆の側にたった美術による社会活動を展開しています。2000年代半ばには米軍基地闘争がおこなわれていたテチュリに移住し、住民の闘争や生活に取材した作品を制作しました。その後も「派遣美術団」を結成し、強制退去に抗議する住民たちや、生活苦にあえぐ労働者たちを支援する活動をおこなっています。

「一粒の希望—土地は誰のもの?!」で紹介したのは、社会的メッセージ性の強い作品のごく一部ですが、タリン・パディやイ・ユニユプのように数多くのアーティストたちが国家と個人、公共と人権、理想と現実のせめぎ合いのなかで、それぞれの信念に立った表現行為や美術活動を展開しているのです。